



## 有機以前に元気な野菜であれ

特集「雑草で土を変える！」の見出しに魅かれて『やさい畑』（家の光協会）2021年10月秋号を購入して読んでみた。22頁におよぶ特集で、筆者は「生ごみ先生」で知られる吉田俊道氏だ。吉田氏は『「元気野菜づくり」超入門』等の著書も出しており、生ごみをリサイクルしての土づくりを推進するとともに、食生活の見直しを提言するなど、日本の農と食を変えていくために、きわめて具体的かつ実践的な活動を展開しておられる▼吉田氏の活動の根幹にあるのが、「おいしい野菜ほど虫がつく」という常識への挑戦である。農業改良普及員を含む長年の経験を踏まえて、「虫は高分子の成分を消化、吸収できない。元気な野菜は『セルロース』『フアイトケミカル』など高分子の成分をたくさんつくるので、虫にとって食べにくくなる。」虫は「『低分子成分の多い不健康な、まずい』野菜のほうがもともと好きで、それを土に戻して新しい生命につなぐ」役割を果たしているとする。有機農業や無農薬云々以前に元気な野菜を作ることが肝心で、「元気野菜とは、土と微生物と太陽の力を自分の力に変えて、病原菌、害虫、紫外線、強風、雨、霜、温度変化、その他まわりのあらゆる障害を『自力』で乗り越えて生きる野菜」のことだとする▼これまで基本となる土づくりに生ごみを利用してきたが、今回、もう一つの方途として雑草による土づくりを打ち出したものだ。生ごみの利用は都市や家庭を中心にした取組みとなるが、雑草の利用は農村部、特に耕作放棄地の活用にも目を向けさせるとともに、「支え手」としての田園回帰も含めた自給的農家による取組みが期待される▼みどりの食料システム戦略はAI等を駆使してのイノベーションに大きく依存しているが、こうした民間技術や在来技術にもつとつと注目・活用していつていい。

(土着菌)